



物
志
日
記

後
篇

特別
13
4268
10





高
手
堂

共ニ露臺小上ノてや天文と觀了して阿呀星已ニ光起
 と失つ。國敵ノ運數盡たり御家安泰の表喜びやと
 帯刀いらくまゝあり何等の事ありて國敵速ニ亡まんとい
 も果ざるは駒澤外面と下見しハ怖し一道の怨氣北よりして
 南す塙外ニ屈死の者やあらんぞらん。帯刀殿いそ見查あれ
 と道ニ帯刀いんと得て即下とら若黨等ニ後門と開かせ
 竊ニ回看どもいと冥暗き深巷時已ニ撫樓の三鼓と報て交
 加非ハ人斷と時をりありて熱沙と声轉して四五個の走卒
 等恠の紋つけたる提燈と先だて一擔の吊臺と携來帶加
 後門と行過ると帯刀やとら喚止若黨がら小令して油膏と扯
 除かせ燭と照してよく視まはせぬやとぬ。蒸青葉煎からよ



5810-16

○交光加保 卷七

種々の菜蔬と堆く盛てどめりける。帯刀ハ蹲居走卒とて屹
 と睨み奴輩ハ誰が内の者なるぞ。夜陰よおらび何所へ
 この菜蔬と拿ちくぞと詢問とて、走卒等戦さく吾伯山
 園が下従よい。今日不料公子ハ鬼注が附て侍る由へ家公より
 上の庄の天寧寺へ大般若の祈禱と托と申され。大衆へ明早の
 餐膳の聽用せしむ。夜深ぬがら菜蔬と餽申さる。よていと陳じ
 ける。帯刀更よ信然とせず。直よ手の者を令して那の走卒等
 と圍住吊臺とバ裏頭へ換入させ。即時菜蔬と除去させ。検査
 見よ果して一個の死屍を露出さる。走卒等ハ睨目頓口て面色
 乍土の如し。帯刀ハ眼と念じ。汝等ハ殺人の同類か。とぞし。科
 報て助け。圓才はどよ辱く想ひその屍とさし。閣圓と汝が主

ハさらまり。誰よめれ。倘この事と塵ごうりも矢口よあめてハ
 早速拘到縛鹹と斫志むべしと嚇さきて。走卒等ハ大家
 低くと寒戦出。咬牙各地ハ俯伏て合血ふり。怒命の
 恩と謝し。強て脱たる腰と伸競く。臺公荷去ぬ。駒澤次郎左
 衛門出来屍と檢とり。ハ鞭瘡とおぼし。肥肉ハ紫青色の
 痕印たまども。總て致命處とむづれり。おと治をべきハ檀中
 小微一縷の生氣残さると。やさら熱き手巾の類よて遍身
 と蒸し温めさせ。木乃伊と許多飲しむまば。時よりありて
 死者ハ吻と息噴廻し。兎角去てや言不どよ。おらび何所へ
 申夜よ豹藤内ハ壘殺されたる。木綿屋徳兵衛おらび次郎左
 衛門。その口敷と聞。熟く帯刀と謀て。火速荻野祐仙ハ

智國
と
安し
す

○安九加保 卷七



○安九加保 卷七

あし
五



○九

拘到来らせ直は拷問は掛し。祐仙ハ責若は及らねて
山岡玄番が岩代瀑布太を荷擔叛逆を企てし。豹藤
内とて頗膽略もある波臣と扶持萬の泰謀と種々の陰匿
と計較する一五一十と。おらもねく吐露せり。さてまゝ今日も
山岡が二子千鶴丸は邪魅の附たる所以と何如小と尋るに
家公の畱王の徒然と慰人と梅香了鬢輩ハ僅くハ歳の千
鶴丸と傳て看樓の摺子より通衡の往来と下視し何く
とと嘯きていと喧し日もちりぐの入りこふ一個の毒蛇を
が經過くり例のそらと摺子の下は在て百般と蛇と弄使て饒
舌る侍女どもいと興がてて餘念ぬく。いつう簾子とさ
過半捲りけたる。和子の乳媪が膝は尻りけて在すと弄
蛇を見はこもぬるより。竹やらん念々有聲て已に領り蛇を
ほどけば。這の蛇晃くと閃きて看樓の裏は飛入る侍女共ハ掌
と叫ひて忙惑へるその間。那曲者ハ何處へ往けんうられんぞ
ぞぬる。千鶴丸はこも魔まで發急驚風られ大熱灼が如くぬれ
拘傳乳媪ハ安らざるもい忙ハ内房へ抱き行て種くは勞き
それ侍女どもハ醫師は禱師よとた駭き騷ぎ總て人心地もは
悪も強く愛も強き山岡殿歸端とをとや。草駄
天の如く内房は跑入て母ぬき愛子ハ一入可愛さもい
やまら。千鶴丸が病床は襯き肚腹もど撫摩つ見て
あるよ。あいつうよ。いと腫き蛇の鎌首立て山岡ハ睨きたる
紅の舌はぬらしくと出。幾尋ともぬく稚の腹と巻死

山岡玄番 豹藤 波臣 扶持 萬の泰謀 種々の陰匿 吐露 何如 小と尋る 簾子 過半 捲り けたる 和子 乳媪 膝は尻り けて 在すと 弄蛇 經過 くり 例の 所らと 摺子の 下は 在て 百般と 蛇と 弄使て 饒舌る 侍女 ども いと 興が して 餘念 ぬく 一つう 簾子 と さ 過半 捲り けたる 和子 乳媪 が 膝は 尻り けて 在すと 弄蛇 見は ころも ぬる より 竹やらん 念々 有聲て 已に 領り 蛇を ほど けば 這の 蛇 晃くと 閃きて 看樓の 裏は 飛入る 侍女 共ハ 掌と 叫ひて 忙惑 へる その 間 那曲 者ハ 何處 へ 往けん うられん ぞ ぞぬる 千鶴 丸は こも 魔まで 發急 驚風 られ 大熱 灼が 如く ぬれ 拘傳 乳媪 ハ 安ら ざる も い 忙ハ 内房 へ 抱き 行て 種く は 勞き それ 侍女 どもハ 醫師 は 禱師 よ と た 駭き 騷ぎ 總て 人心 地も は 悪も 強く 愛も 強き 山岡 殿 歸端 と を と や 草駄 天の 如く 内房 は 跑入 て 母ぬ き 愛子 ハ 一入 可愛 さも い やまら 千鶴 丸が 病床 は 襯き 肚腹 も ど 撫摩 つ 見て ある よ あいつ うよ いと 腫き 蛇の 鎌首 立て 山岡 ハ 睨き たる 紅の 舌は ぬら しく と 出 幾尋 と も ぬく 稚の 腹と 巻死

たるはいと可惡まうと凍まりげなり。さうもの山岡も呆果て
 只是彩の驗者と聚りて。多方禳法を做さしむまど。何
 の知もあらで。雅ハ倍煩悶しめる光景ふまば。玄番元ハ茫然
 として困るところつてぞ在りける。かくて省顧よ来くる同然衆
 の勸よ任せて。名たる佐伯一清軒と招りしむ玄番ハ東
 道支度して待よ。一清軒詰且參りて。その托と允ひ懸て
 卦を起ると又山風蠱と得る。一清や霎時思唯さて
 りやう。山風蠱といへる卦にて三毒盤の上を相食の
 兆形り。三毒ハ蝸牛蟾蜍蛇の三毒なり。まるに今變支
 小りて味ひ侍る。大毒已よ中毒小毒と併食して
 只一毒とす。妖氣最深重。唐土にてハこれと金蝨蠱毒
 とりよ。世の取謂大神ことなり。さうもの邪崇中ノ一
 常の加持祈禱の禳べうもあらず。拙老も平常の蠱毒ハ
 頃日ハ泰山府君の法と修して禳除たもど。公子の患た
 けハ鬼注ハ一方ふらぬ大毒取をハ拙ハ淺術の及所ハ侍らむ
 といハ山岡ハまも懺悔ハ禳除の法と需て止ざりける。一清
 やハ沉思せし。有有有。卦象ハ蛇龜小因ひの意あり。さあれ
 ハ玄武神聖の靈威よて。容易この邪崇と除くべし。その
 法ハ從來顯聖ある靈符の尊像と設けて。皿ハ一頭の龜を
 貯へ。妙見大菩薩の大照と修ひ給り。蠱毒ハ一所ハ退散す
 べし。必しも疑あるべからず。倘又三十四時を過これぬハ
 いらうその詮ぬるべし。最鉄口もいひ放ぬ。山岡う

逆意の事も歴然と卦面に見えられども、深く忌諱を避
 聊も其色とも顯るべしとや、玄番允秀門ハ一清
 軒が明斷は服し、聞しは優る國手りふと厚く賞し
 田ける時にも主僧と御館より急の御召ありりりぞ
 玄番允ハ何どく窘迫たきども、嚴命辞がうし、只得登城
 せんと出かき、豹藤内と機密房は呼よせてりしや、賤
 息が禳法ハ時刻の期あまば汝ハ一天事ハ托ねくさう、そハ
 如くせよと私語おつ、陪後と將て出せとけり、ふまハこれ
 山岡が豹藤内と己が腹心と援思へる故るりり、玄番允
 秀門ハ早御館小候て劍の席に着よてや長臣等ハ起光
 来りて誥居りり時むりりりて駒沢次郎左衛門何の間
 縦禁ありしが、麻社下の襪積整く温くち上て、正面に坐
 と占さてりしや、小臣不肖ふとども今日事の裁判お
 とべき釣旨と蒙りたまは、高坐御免と式代せし、冷泉
 帶刀やとら令と傳訴人木綿屋徳兵衛犯人萩野祐仙
 と書院の白洲へ拽出さし、山岡玄番允閃と看り、
 得て面土色の如く、岩代瀑布太と眼を相着せ、各懐鬼胎
 遠巡せり、駒沢次郎左衛門威儀と正し、各懐て奉承昨夜
 まり斯くの事あり、木綿屋徳兵衛養生して審し申出し、
 早速祐仙と拘到痛拷問よかけ、所叛逆の張本山岡玄番允
 岩代瀑布太と合夥君と幽籠奉り、己が子千鶴丸と儲君
 とし、大内家の社稷を奪人と謀り、又小臣と
 人と祐

〇 実在加保 卷之七



仙は命金子もて徳兵衛が兄修驗加縷羅院が命を買
 得。小臣へ寛の難題を声言且渠は自害せしめて小臣が雪
 寛の滅口とさせたることども逐一白状して。玄番元瀑布太
 が罪科已まかく顯然たるは。天網恢々疎にして漏さずとい
 け事ふらん。と叙よける。玄番元ことを聞て呵々と笑ひ
 修驗がことハ姑息我を叛逆かどくハ何等の讒語さるぞ
 とつひも果ぬ。瀑布太も慄ず居犬高はぬりて。小生
 とも謀反の荷擔人といハ旁痛し。そハ什彦ぞ歴然と證
 扱の侍るや。和殿こそ眞の叛逆人ふと。靈符の一軸と豹藤
 内は盗取せし事ハ渠が白状明白なる。上意呼らり
 心得と念と發して。朝々れども。次郎左衛門ハ見向も

やらす何呀祥一ハ何處に在。早く来と高やうと叫び
 けをバ。掖房より波と應て豹藤内とハ方便の假名實ハ
 駒澤了庵が賤息祥一山岡殿へ見参せんと呼らり。左
 派は打份右の手は三方が拿左手ハ千鶴丸の手を携
 て悠々と坐し即バ山岡見らり。原来豹藤内目ハ駒沢ら
 間隙に在つら。謀得つと想しは謀らるるこそ朽惜けれ
 と。天と仰て長嘆し。あの三方ハ我ハ賜劍自盡との結構
 ぬらうと。熟視バ。短刀はあらと。龜と纏へる蛇と載て
 めりぬ。祥一もねて。自家弱冠して父了庵が勘當とけ本藩
 と亡命甲賀山は隠し居て忍術と修行せし。小其頃痘と
 病て面容變人ハ認めらぬと幸と義兄次郎左衛門密

罪と償ふ例あり。曲て小臣が諫め従ふと多分
 演説よ。君候ハ適間より。御上段の隔簾より。光景
 と透窺ありせらる。さうやとらけ時次郎左衛門とらうく
 召ま。次郎左衛門山岡が家禄ハ千鶴丸へ申しにらうぞ。
 鴻臚ハ隠居させよ。その餘ハ汝が可由自裁よ。所置し
 いひとて入せ給へ。次郎左衛門波波と俯伏てうら懼と
 領ぬ

二十回 毒

とま。ハ駒澤次郎左衛門ハ殿の釣青よまうせ。岩代瀑布太が
 死罪と赦し。己が属吏と做して海田開發の惣司たらしむ
 瀑布太ハ殿の御惠公辱るく想ひ。又駒沢が恩とて
 仇ハ酬たる好意と好し。乍邪心と翻し。悪く強けとハ善小も
 強とて。いち早く忠功と建て。舊悪と償とんと。種く工夫と
 疑し。劣勞と厭はず。努力とて。夫と使と度と。つとす。寛
 やう物して速く。成駒沢が指畫の。く。多年らば。て。遂に幾
 千町の腹田とぞ。闢き。この新田の隄防ハ。影の闇と
 設た。ま。早天よ。闇と閉。雨濕よ。ハ。闇と開て。落潮
 落し。故。水早の損ぬ。萬。歳の賣地と成。る。か
 や。駒澤ハ。舊新田と闢。こと。古田。荒る。とて。好。こと。ど。この
 件田の新法ハ。又。十全の團益と查勘。出して。闢。せ。たる。よし
 あり。かくて。駒澤が。執成。よ。木綿屋徳兵衛ハ。孝行。持
 者。あり。と。褒。と。せ。ら。る。御城下。於。て。販布。買賣。の。惣。問。九。仰。せ

山崎闇斎



山崎闇斎



主と議一介の使と差て、登時の身價の十倍ぬる金子に
ハ吉兵衛へ共せ又數の絹帛ぬお六へ贈て、その謝意を
表し、深雪まこと己が套房金ぬ出し、人と央、赤
馬が関ぬる遊女小支那が身ぬ償ハ、常々来去る
雞作とハ倚情あるはと知て居ま、渠は妻せつ、後來
深雪ハ男女の児と夥産け、小次男某とハ岳父引
之助請養て己が箕裘と襲し、ぬ、一年鎌倉殿より
駒澤が經濟の大才あることと聞召およせらる、御昵
近し擢用ハるべきとの御教書到来せし、大内介滿興
朝臣大命と謹承給ひ、即日次郎左衛門と召て御誼の趣に
釣命たまへ、次郎左衛門感激奉承と票わけ、舊玉は春

ハ盡せぬ、只得秩禄と奉辭、御休暇を願け、ハ、満興
朝臣御釣諾あらせら、渠が知行三千石と同家祥一郎
小賜、舊の持高併て三千五百石と、騎隊長と命られ
ける、乃、駒沢が功勞と報せらる、故、乃、おま、り
次郎左衛門ハ舊姓ハ後し、宮城次郎左衛門春雄と名告
家春が、推考して、途、鎌倉指て、起程ける、奴、深雪ハ故
小大津の驛ハ舍て、父老土人どんと呼出し、夥の資財に
頒與へて、渠等が舊誼と謝し、又海道一路の処、よて、此の看
顧、ぬ、り、者、ぬ、も、有、差、ぬ、物、と、取、せ、一、飯、の、徳、と、だ、ぬ、
ざるハ、ま、り、り、不、日、鎌、倉、に、到、て、泰、上、せ、る、は、聞、わ、げ、ぬ、は
程、ぬ、く、召、出、さ、し、て、拜、謁、と、は、し、り、ぬ、君、ハ、速、に、ま、り、満、足、せ、り、と

大抵百歳と超つべき態よて世の散楽に瀆する高砂の尉統
 のやうよて。仙風道骨と具て顔色ふと光滑に夫婦の老人に
 値遇きと語りたるもいと芽出とき例よどあうなる

朝顔日記卷之七 大尾

書

林

京都寺町通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佑兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同本石町十軒店	英 大 助
同浅草茅町貳丁目	須原屋伊 八
同芝神明前	岡田屋嘉 七
大阪心齋橋通博労町	河内屋茂兵衛
同心森橋通本町角	河内屋藤兵衛

